

# 真偽判断にかかわるモダリティ形式のタ形の意味

-各テキストにおける現れ方とタ形のタの意味を中心に-

金 惠 娟\*

(e-mail : mahou@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味
  3. 「ようだ」「らしい」のタ形の意味
  4. 「はずだ」のタ形の意味
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

仁田 (1989) は真の典型的なモダリティは、「言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である (p.34)」と述べ、「発話時における」「話し手の」といった要件を充たした心的態度の表現を<真正モダリティ>、充たしていない場合を<疑似モダリティ>と仮称した。そして (1) (2) のように、形式自体が過去形を持つ「ようだ」「らしい」などは「もはや発話時の心的態度を表すものではない。(中略) これらが表しているものは、心的態度や心的態度に関わるものであるにしても、もはや主体的な心的態度の表明そのものといったものではなく、客体化された心的態度の存在やそういった心的態度を起こさせる客観的な世界の様相といったものへと移っているものと思われる (p.37)」と述べた。

(1) かれはそこを勘違いしているようだった。 (天使) (仁田 (1989) p.36)

(2) 世間体といわれて、育子の心もさすがにちよっぴり動揺したらしかった。

(荷物) (仁田 (1989) p.36)

---

\* 南ソウル大学 講師 現代日本語学

また、益岡（1991）はモダリティとは主観性の言語化されたものであり、「表現者自身の判断・表現態度でなければならず、また、表現時での判断・表現態度でなければならぬ（p.35）」と説明した。さらに益岡（1991）は表現者の判断・表現態度を表す形式の中には、(3)の「らしい」のように、過去形を取り、表現時以外の時点での判断を表すなどのような客観化を許すものも存在すると述べた。

(3) 花子はどこかに出かけるらしかった。（益岡（1991）p.36）

益岡（1991）はモダリティ形式には恒常的に主観性を表現するものと客観的表現になり得るものがあるとし、前者を「一次的モダリティ」、後者を「二次的モダリティ」と呼んだ。そして、常に主観性を表現する「だろう」は「一次的モダリティ」であり、過去形を持つ「らしい」は「二次的モダリティ」であるとした。

仁田（1989）、益岡（1991）は用語に違いはあるものの、仁田（1989）の「真正モダリティ」と益岡（1991）の「一次的モダリティ」は主体的（主観的）な心的態度を表す表現、「疑似モダリティ」と「二次的モダリティ」は客体的（客観的）な表現であるということによって同一の概念と見なせられると思われる。仁田（1989）、益岡（1991）に従えば、「らしい」「かもしれない」「はずだ」のタ形は「過去時における」客体的（客観的）な表現になると思われる。

しかし、庵（2006）は一口に疑似モダリティと言っても、その内実は完全に明らかにされておらず、タ形でも発話時における判断を表すことはあると指摘した。

- (4) a. そうか、田中さんは明日来る んだ。  
 b. そうか。田中さんは昨日来た んだ。  
 c. そうだ。田中さんは明日来る んだ。  
 d. そうだ。田中さんは昨日来た んだ。（庵（2006）p.141）

庵（2006）は(4)の「のだ」は「発話時における発見」、「のだ」は「発話時における再発見」を表し、「のだ」と「のだ」は対立しており、この場合のタ形は発話時を表すと述べた。

また、高梨（2004）は(5)の「べきだった」は反事実を意味し、「話し手の発話時の評価」を表すとした。

- (5) 昨日連絡するべきだったんですが、できませんでした。（高梨（2004）p.44）

高梨（2004）はある事態が実現した場合を<事実>、実現しなかった場合を<反事実>を呼んでいる。本稿での<事実><反事実>の概念は高梨（2004）に従う。

(5) では「昨日連絡することが実現しなかった」ことを意味し、「べきだった」は反事実を表している。

庵 (2006)、高梨 (2004) で言及されているように、モダリティ形式のタ形の意味は一概では説明できないと思われる。

そこで、本稿ではモダリティの体系で「認識のモダリティ」の真偽判断にかかわるモダリティ形式として位置付けされる<sup>1)</sup>「かもしれない」「にちがいない」「ようだ」「らしい」「はずだ」のタ形の意味について考察する。具体的には会話文と小説・新聞に現れる「かもしれない」「にちがいない」「ようだ」「らしい」「はずだ」のタ形の現れ方及びそれぞれのタ形の意味を分析する。そしてこれらのモダリティ形式はタ形のタの意味の違いによって「かもしれない」「にちがいない」、「ようだ」「らしい」、「はずだ」の3つのタイプに分類されることを明らかにする。

## 2. 「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味

丹羽 (1992) は「かもしれなかった」「にちがいなかった」は「話し言葉では用いられない傾向が強い[中略]これらは書き言葉、それも小説や回想記など「語り」に専ら用いられる (p.16)」と述べた。

- (6) a. あいつはいくかもしれないね。  
 b. あいつはいったかもしれないね。  
 c. ? あいつはいくかもしれなかったね。  
 d. ? あいつはいったかもしれなかったね。 (丹羽 (1992) p.16)
- (7) ? きつと心配しているにちがいなかったよ。 / いたにちがいなかったよ。 (丹羽 (1992) p.16)

丹羽 (1992) で指摘されている通り、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話には使われにくいと思われる。これは『新潮文庫の100冊』の「かもしれない」「にちがいない」のタ形を調べた結果、「かもしれない」のタ形214例、「にちがいない」のタ形176例のうち、「かもしれない」「にちがいない」のタ形が会話において現れたのは2例に過ぎなかったことから傍証される。小説の会話に現れる例の分析は後述する。

また、毎日新聞2000年の1年間のデータから「かもしれない」「にちがいない」のタ形を調べた結果、「かもしれなかった (かも知れなかった)」は9例、「にちがいなかった (に違いなかった)」は6例見つけた。2002年1月から5月までの5ヶ月間の毎日新聞に

1) モダリティの体系及び認識のモダリティについては三宅 (1995)、宮崎 (2002)などを参照されたい。

において「かもしれない」「にちがいない」のル形がそれぞれ10500例、210例見つかったことと比べると、新聞における「かもしれない」「にちがいない」のル形とタ形の使用頻度の差は明らかである。

- (8) 荒れたピッチになれば、グラウンダーのパスは微妙に乱れる。パスで組み立てる日本のサッカーが狂うかもしれない。(毎日新聞2000/09/15)
- (9) なぜ、こんな事故が起きてしまったのか、ロシアの人々は、この歌を聞きながら自問自答したに違いなかった。(毎日新聞2000/08/23)

(6)～(9)から、会話、新聞において「かもしれない」「にちがいない」のタ形は使われにくいと思われる。それに対し、小説においては使われる。『新潮文庫の100冊』の「かもしれない」「にちがいない」のタ形を調べた結果、「かもしれない」のタ形は214例、「にちがいない」のタ形は176例見つかった。そのうち、2例を除いてすべて地の文に現れていた。このことから、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は主に小説の地の文に現れると考えられる。

- (10) それは壁がその力で森の空気を乱しているからかもしれないし、あるいはただの地形上の問題かもしれない。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
- (11) テントの中にいる男たちもおそらく、リーダーにおとらないような服装をしているに違いなかった。(孤独の人)

(10) (11) の「かもしれない」「にちがいない」のタ形はル形にしても時間的意味は変わらないと思われる。

- (10') それは壁がその力で森の空気を乱しているからかもしれないし、あるいはただの地形上の問題かもしれない。
- (11') テントの中にいる男たちもおそらく、リーダーにおとらないような服装をしているに違いない。

(10) (11) の「かもしれない」「にちがいない」のタ形のタは工藤(1995)の「かたりのタ」であると考えられる。

工藤(1995)は小説の地の文に現れるル形は小説の内部の登場人物の視点から登場人物の心的態度を、タ形は語り手としての視点からの登場人物の心的態度を表していると、この場合のル形とタ形は判断時の違いではなく、視点の違いであると述べた。

- (12) [前略]しかし、誰が出て来るか分からないのだった。あの母親が出て来るかも知れなかった。[後略] (工藤(1995) p.193)

- (12') ・しかし、誰が出て来るか分からないのだ。  
 ・あの母親が出て来るかも知れない。 (工藤 (1995) p.193)

工藤 (1995) は (12) と (12') について、意識の直接的再現である〈内的独白〉であれば非過去形を使用しなければならないが、あえて過去形を使用すれば、作中人物の意識の〈対象化〉がおこってくると説明した。すでに述べたように、『新潮文庫の100冊』の「かもしれない」「にちがいない」のタ形の390例中、会話文においてタ形が現れたのはわずか1例ずつであった。

- (13) 「いや。あれは神じゃない。蜘蛛の巣にかかった蝶とそっくりだ。始めはその蝶はたしかに蝶にちがいないかった。だが翌日、それは外見だけは蝶の羽根と胴とをもちながら、実体を失った死骸になったいく。(後略)」 (沈黙)
- (14) 「おまえが小島や下役人の名を出さず、博奕のことも口にしなかったのはよかった」と岡安は続けていた、「——もしもこれらのことが明らかになったら、もともと寄場の制度に反対な成島どのは、町奉行へどんな進言をするかわからないし、そうなれば事は、この寄場の存廃にかかわるところまで発展するかもしれない」 (さぶ)

(13) は「にちがいない」のタ形が現れているが、その理由は「にちがいない」のタ形を含む文が「始めは」で始まっており、また、次の文で「翌日、～死骸になっていく」が続いていることから考えられる。この場合の「にちがいない」のタ形は過去時における判断を表すため、タ形が使用されたと考えられる。これは (13) の「にちがいない」のタ形を (13') のようにル形に変えられないことから補強される。

- (13') \* 始めはその蝶はたしかに蝶にちがいない。だが翌日、それは外見だけは蝶の羽根と胴とをもちながら、実体を失った死骸になったいく。

(13) の「にちがいない」のタ形はル形にすると非文になるのに対し、(14) の「かもしれない」のタ形は (14') のようにル形にしても時間的意味は変わらない。

- (14') 「——もしもこれらのことが明らかになったら、もともと寄場の制度に反対な成島どのは、町奉行へどんな進言をするかわからないし、そうなれば事は、この寄場の存廃にかかわるところまで発展するかもしれない」

(14) の「かもしれない」のタ形は工藤 (1995) の作中人物の意識の〈対象化〉であると考えられる。

以上、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話文、新聞においてはほとんど現れず、主に小説の地の文に現れることを明らかにした。また、この場合の「かもしれない」「にちがいない」のタ形のタは工藤（1995）の「かたりのタ」であると述べた。

### 3. 「ようだ」「らしい」のタ形の意味

高瀬（1999）はテンスの違いによる「ようだ」「らしい」の意味を分析している。

- (15) [前略]フォームのベンチに腰をおそして、手首の脈にさわってみる。かなりはやい。血圧があがっているようだ。[後略]（石川達三・四十八歳の抵抗）  
（高瀬（1999）p.88）
- (16) [前略]菊池はなおも宮内の顔を見つづけたが、彼の証言の信用性について、ある確信に達したようだった。（大岡昇平・事件）（高瀬（1999）p.89）
- (17) めぐみの表情が、しだいにけわしくなり、また、余裕がなくなっていくのが、十津川にも、わかった。（どうやら、われわれの推理があたっていたらしい）と、十津川はおもった。（西村京太郎・特急「にちりん」の殺意）（高瀬（1999）p.87）
- (18) [前略]「どうするって言っても、どうにもならないわ」と理恵はまえよりもすこしふとい声になっていった。妊娠すると声帯までかわるらしかった。（四十八歳の抵抗）  
（高瀬（1999）p.89）

高瀬（1999）は（15）（17）は非過去形をとっており、おしはかりの意味を表している。それに対し、（16）（18）は過去形をとっており、過去に存在した「菊池のようす」「理枝の声のらしさ」を記述していると述べた。

また、庵（2006）は「らしい/らしかった」の部分のテンスは絶対テンスであり、それに前節する部分は相対テンスになっているとし、「らしかった」の「た」は通常の過去を表す「た」である（p.142）」と述べた。そして、「らしかった」「ようだった」は「過去における兆候の存在のみを表す（p.143）」と説明した。

- (19) a.その人に会いに行くらしい。  
b.その人に会いに行くらしかった。（庵（2006）p.142）

高瀬（1999）、庵（2006）は「ようだ」「らしい」のタ形を「過去における兆候（ようす・らしさ）の存在のみを表す」としているが、「ようだ」「らしい」のタ形は（20）（21）のように、発話時（現在）における判断を表す「今（にして）思えば」と共起する場

合がある。

(20) 今思えば、最初っからペンダントのことが聞きたくて杉山選手に声をかけたようだった。

(<http://writing-sun.com/sports/sev/html>)

(21) そういえば、昔齒をならす奴も居たなあ。今にして思えば、あれは一応音楽を奏でているらしかったが、それ以前にあれは汚らしく本当に嫌であった。

(朝日新聞2004年5月25日)

(20) (21) の「ようだ」「らしい」のタ形は<推量>を表すと思われるが<sup>2)</sup>、新聞に現れており、この場合の「ようだ」「らしい」は工藤 (1995) の「かたりのタ」であると考えられる。したがって、(20) (21) の「ようだ」「らしい」のタ形のタは過去時における判断を表すのではなく、「かたり」に現れる外的視点を表すタであるとも考えられる。

また、「ようだ」「らしい」のタ形は (22) ~ (25) のように会話文に現れる場合がある。

(22) 上宮：最後は会場が一体になってスタンディングオーベーションでしたね!!

武内：公演前の食事やお酒を楽しむエントランス棟の雰囲気もそうだけど、日本に居ながらにして、ヨーロッパで舞台を観ているようだったね。

([www.tv-asahi.co.jp/announcer/personal.women/takeuchi/body1.html](http://www.tv-asahi.co.jp/announcer/personal.women/takeuchi/body1.html))

(23) 船内のアナウンスで眼がさめたよ。外を覗くと曇空だったけど雨は降っていないようだったよ。 ([www.kumaplan.com/kumabike/2003hokkaido/0814.html](http://www.kumaplan.com/kumabike/2003hokkaido/0814.html))

(24) 「素敵なパーティだったね」「2人らしかったね」なんて、来てくれたゲストに感激されたいですね！そんな時の力強いアイテムがテーブルコーディネイト

([best-color/intex.html](http://best-color/intex.html))

(25) お気楽「「しっしい」さん開き直ってますね (笑)」

ライカ「あー。唱和試験と言うの不合格らしかったよ (笑)」

お気楽「確か、一箇所だけ間違えたとか聞きましたけど？」

([homepage2.nifty.com.sonicfeeling/mokuyou.html](http://homepage2.nifty.com.sonicfeeling/mokuyou.html))

(22)~(25)の「ようだ」「らしい」のタ形は順に<比況><様態><接尾語><伝聞>を表しており<sup>3)</sup>、これらは話者の命題に対する心的態度を表すというよりは、客観的な事態を表していると考えられる。言い換えれば、<比況><様態><接尾語><伝聞>

2) (20) (21) の「ようだ」「らしい」のタ形は<過去のようす・らしさ>を発話時において述べているとも解釈できると思うが、この場合のタ形のタの意味については今後の課題としたい。ここでは高瀬 (1999) 、庵 (2006) の分析と異なり、「ようだ」「らしい」のタ形が過去における兆候のみを表すのではなく、発話時における<推量>を表す場合もあるという事実に注目したい。

3) <接尾語><比況>は<伝聞><様態>の意味用法と並べられるものではないと思うが、ここでは便宜上並べた。

は命題的（事柄的）色合いが強いと思われる。このことから、会話に現れる「ようだ」「らしい」のタ形のタは「命題に近いタ<sup>4)</sup>」であると考えられる<sup>5)</sup>。そのため、(22)～(25)では「ようだ」「らしい」のタ形が会話文において現れたと考えられる。これは「ようだ」「らしい」のタ形が＜推量＞の場合、不自然であることから傍証される。

- (26) a. ? (消防車のサイレンの音を聞いて隣の人に) 近くで火事があったようだった。  
 b. ? (部屋に灯りがついているのをみて隣の人に) 母が帰ってきているらしかった。  
 (26') a. (消防車のサイレンの音を聞いて隣の人に) 近くで火事があったようだ。  
 b. (部屋に灯りがついているのをみて隣の人に) 母が帰ってきているらしい。

以上の分析から、「ようだ」「らしい」のタ形は小説・新聞に現れる場合は用法の制限なく現れ、この場合のタ形のタは「かたりのタ」や「命題に近いタ」であると説明した。それに対し、会話文に現れる場合は用法の制限があり、この場合のタ形のタは「命題に近いタ」であると述べた。

#### 4. 「はずだ」のタ形の意味

「はずだ」のタ形は「かもしれない」「にちがいない」のタ形と対照的に会話文においても自然に現れる。

- (27) 「戦争の終わりに、脱走しようとして衛兵に撃たれたという話だった。解剖する筈だったのに、終戦で取りやめになってね。[後略] (死者の著り)  
 (28) 校長は「素直ないい子だった。これから友達を増やし、楽しい学校生活を送る筈だったのに」と話していた。 (毎日新聞2002/02/13)  
 (29) 「計算では十月くらいまで食べていかれるはずだったんだ」肉を口にほおばったままで内藤は言った。[中略]知らないうちに貯金が減って行って、二ヶ月分くらい喰いこんじゃった (一瞬の夏)  
 (27)～(29)は過去のある時点において「解剖する」「楽しい学校生活を送る」「十月くらい

4) 本稿では、会話文に現れる「ようだ」「らしい」のタ形のタを「命題に近いタ」であるとしているが、本稿でいう「命題に近いタ」とは「雨が降りました」におけるタのように、ある事柄を過去の事実として客観的に述べる場合のタを指す。会話文に現れる場合の「ようだ」「らしい」のタ形は命題を過去の事実として客観的に述べるという意味で「命題のタ」と似ていると思うが、「ようだ」「らしい」のタ形が会話文に現れる場合、用法の制限があることから、「ようだ」「らしい」のタ形のタは「命題のタ」と同じタであるとは考えていない。その意味で、本稿では、「ようだ」「らしい」のタ形のタを「命題に近いタ」と呼んだ。「命題のタ」と「ようだ」「らしい」のタ形のタの共通点・相違点についての分析は今後の課題としたい。

5) 小説・新聞に現れる「ようだ」「らしい」のタ形が＜様態＞＜伝聞＞を表す場合のタ形のタも会話文と同様、「命題に近いタ」で解釈できる。



まで食べていかれる」予定があったことを発話時（現在時）において述べている。(27)～(29)の「はずだった」は単なる過去の時点における判断を表しているのではなく、過去の時点での予定と現実との食い違い（反事実）を表している<sup>6)</sup>。この場合の「はずだ」のタ形のタは寺村（1984）の「ムードのタ<sup>7)</sup>」と関連付けて考えることができる。

寺村（1984）は「ムードのタ」の一つとして「過去に実際起こらなかったことを、起こり得たことと主張する（p.335）」を挙げている。

- (30) 「[前略]もう少しおそかったら助からなかった」[後略]（朝日新聞）（下線寺村、以下同じ）  
（寺村（1984）p.335）

寺村（1984）は（30）のタは、「過去の事実をそのまま述べているのとは明らかに異なり、「実際は助かったけれども、もう少しおそかったら助からなかっただろう」という、あり得た過去の事象を推測していることを表している（p.335）」と述べた。つまり、（30）のタは反事実を表している。(27)～(29)の「はずだった」は反事実を表しており、この場合のタは寺村（1984）の「ムードのタ」であると考えられる。

また、小説・新聞に現れる「はずだ」のタ形も反事実を表す場合がある。

- (31) 「……俺のファイトマネー、四万だって」「えっ?」「四万!」私とエディは声を上げた。羽草戦のファイトマネーは二十五万のはずだった。（一瞬の夏）  
(32) 債権者の1人だった不動産業者に約2400万円が支払われるはずだったが、約1300万円しか支払われなかった。（毎日新聞2002/01/05）

(31) (32) では、現実では「ファイトマネーが二十五万でなかった」「2400万円支払われなかった」ことを意味し、「はずだ」のタ形は反事実を表している。しかし、(33) (34) からわかるように、「はずだ」のタ形が常に反事実を表しているわけではない。

- (33) あの傷は瘢痕となって、たしか高等学校に入るころまで残っていた筈だった。（楡家の人びと）  
(34) 日本の「主権」が侵害されたことが、事件の本質であるはずだった。だから政府はこぶしを振り上げ、謝れと中国を迫った。（毎日新聞2002/05/23）

(33) (34) の「はずだ」のタ形のタは寺村（1984）の「ムードのタ」の一つである「忘れていた過去の認識を思い出す（p.338）」のタに近い<sup>8)</sup>と考えられる。

6) 本稿での会話文における「はずだ」のタ形の用例23例中、反事実を表している場合は22例で、表していない例は1例のみであった。本稿での用例の数は少なく、一般化はできないと思うが、傾向として会話文に現れる「はずだ」のタ形は主に反事実を表していると考えている。今後用例を増やし、さらなる分析を行いたい。

7) 寺村（1984）は「ムードのタ」を6つに分けているが、詳しくは寺村（1984）pp.334-344を参照されたい。

8) (31) (32) の「はずだ」のタ形のタは過去の認識を思い出しはいるが、過去の認識を忘れていたわけではないので、寺村（1984）の「ムードのタ」と完全に一致するとは言えない。そのため、寺村（1984）の「忘れて

また、(33) (34) の「はずだ」のタ形はル形に変えても時間的意味は変わらないと思われる。このことから考えると (33) (34) の「はずだ」のタ形のタは工藤 (1995) の「かたりのタ」であるとも考えられる。

(33') あの傷は癍痕となって、たしか高等学校に入るところまで残っていた筈だ。

(34') 日本の「主権」が侵害されたことが、事件の本質であるはずだ。だから政府はこぶしを振り上げ、謝れと中国を迫った。

以上の分析から、「はずだ」のタ形は会話文においては主に反事実を表し、この場合のタ形のタは寺村 (1984) の「ムードのタ」であると述べた。それに対し、小説・新聞に現れる場合は反事実を表す場合と表さない場合があり、反事実を表す場合のタ形のタは「ムードのタ」であり、反事実を表さない場合のタは「かたりのタ」であると述べた。また、「はずだ」のタ形のタが寺村 (1984) の「忘れていた過去の認識を思い出す (p.338)」のタに近い場合があり、この場合のタを「ムードのタ」と関連付けて説明した。

## 5. おわりに

本稿では、真偽判断にかかわるモダリティ形式がタ形の現れ方や意味によって「かもしれない」「にちがいない」、「ようだ」「らしい」、「はずだ」の3つのタイプに分けられることを示した。会話文、小説・新聞に現れる各モダリティ形式のタ形の現れ方及びタ形タの意味をまとめると表1>のようになる。

<表 1> モダリティ形式のタ形の現れ方及びタ形タの意味

モダリティ形式テキスト		かもしれない なかった	にちがいない なかった	ようだった	らしかった	はずだった
会話文	出現の可否	×		○ <様態>	○ <伝聞>	○ <主に反事実>
	タの意味			命題に近いタ		ムードのタ
小説・ 新聞	出現の可否	○		○ <様態><推量>	○ <伝聞><推量>	○ <反事実 / 事実><思い出し>
	タの意味			かたりのタ	命題に近いタ/かたりのタ	

「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話文にはほとんど現れず、小説・新聞に現

いた過去の認識を思い出す」のタに近いと記述した。

れ、この場合のタ形のタは「かたりのタ」であると述べた。また、「ようだ」「らしい」のタ形は会話文に現れるが、＜推量＞の用法は現れないという用法の制限があることを示した。それに対し、会話文においては＜様態＞＜伝聞＞を表すことができ、この場合のタは「命題に近いタ」であると指摘した。また、小説・新聞においては用法の制限なく現れ、この場合のタは「命題に近いタ」や「かたりのタ」であると説明した。最後に「はずだ」のタ形はテキストに関係なく現れ、会話文においては主に反事実を表し、この場合のタは「ムードのタ」であると述べた。それに対し、小説・新聞においては反事実を表す場合と表さない場合や思い出を表す場合があることを示し、この場合のタを「ムードのタ」や「かたりのタ」と関連付けて説明した。

本稿では、真偽判断にかかわるモダリティ形式のうち、タ形を持つ疑似モダリティ形式を分析対象にしたが、今後タ形を持たない真正モダリティ形式「だろう」と比較を行い、真偽判断にかかわるモダリティ形式の全体像を明らかにしたい。

## 【参考文献】

- 庵功雄(2006) 「モダリティ形式のタ形に関する一考察」『日本語文法の新地平2』くろしお出版、pp.137-154
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 高瀬匡雄(1999) 「モーダルな意味の変更—「~らしい」「~ようだ」を中心に—」『立正大学文学部論叢』110、pp.83-98
- 高梨信乃(2004) 「評価のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則編『モダリティ』くろしお出版、pp.80-120
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 仁田義雄(1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版、pp.1-56
- 丹羽哲也(1992) 「過去形と叙述の視点」『国語国文』61-9、京都大学文学部国語学文学研究室、pp.16-34
- 益岡隆志(1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 三宅知宏(1995) 「「推量」について」『国語学』183、pp.86-76
- 宮崎和人(2002) 「認識のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則編『モダリティ』くろしお出版、pp.121-172

## 【用例出典】

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（1995）、新潮社

『CD-毎日新聞』2000年1年間・2002年1月～5月、日外アスシエーツ  
朝日新聞 2004年5月

[www.yahoo.co.jp](http://www.yahoo.co.jp)

※出典が示されていない例はすべて作例である。

## 要 旨

本稿では、モダリティ形式のタ形が「過去時における」判断を表すという仁田（1989）、益岡（1991）を批判し、モダリティ形式がタ形を取っても「発話時における」判断を表す場合があるなど、モダリティ形式のタ形の意味は一概ではいえないことを示す。そこで、本稿では、真偽判断にかかわるモダリティ形式「かもしれない」「にちがいない」「ようだ」「らしい」「はずだ」のタ形を対象にこれらのモダリティ形式のテキスト（会話文、小説・新聞）による現れ方やタ形のタの意味を考察した。その結果、真偽判断にかかわるモダリティ形式は「かもしれない」「にちがいない」、「ようだ」「らしい」、「はずだ」の3つのタイプに分類されることを明らかにした。

「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話文にはほとんど現れず、小説・新聞に現れることを示し、この場合のタ形のタは「かたりのタ」であると述べた。

また、「ようだ」「らしい」のタ形は会話文、小説・新聞に現れるが、会話文においては<推量>の用法は現れず、<様態><伝聞>を表すという制限があることを指摘し、この場合のタ形のタを「命題に近いタ」であると説明した。それに対し、小説・新聞に現れる場合は用法の制限なく現れ、この場合のタ形のタは「命題に近いタ」や「かたりのタ」であると述べた。

最後に、「はずだ」のタ形はテキストに関係なく現れるが、会話文においては主に反事実を表し、この場合のタを「ムードのタ」から説明した。また、小説・新聞においては反事実を表す場合と表さない場合、さらに、<思い出し>を表す場合があることを示し、この場合のタ形のタを「ムードのタ」や「かたりのタ」と関連付けて述べた。

キーワード：疑似モダリティ、真偽判断にかかわるモダリティ形式のタ形、タ形のタの意味、かたりのタ、命題に近いタ、ムードのタ

투 고 : 2010. 8. 31  
1차 심사 : 2010. 9. 11  
2차 심사 : 2010. 9. 25